在宅療養支援
楓の風

「楓の風」らしい看護の取り組みを発信

# KAEDE TIMES 2026



## 在宅生活を支援するー私たちの試行錯誤

ー在宅を支える全てのみなさまへー
私たち、「楓の風」スタッフが、どのような想いで在宅支援をしているのかを、一人でも多くの方に知っていただきたい！と思い、
「楓の風」らしい取り組みをご紹介する、ニュースレターをはじめました！

在宅の現場から－利用者様の「最期まで自宅で暮らしたい」を支える

# Case 17

Vol.17

一人暮らしの高齢者が、病気の進行や身体機能の低下に直面したとき、自宅での生活を続けるには多くの支援が必要になります。
今回ご紹介するのは、**末期がんを抱えながらも「家に帰りたい」と強く希望された**94歳男性の事例です。ご本人の意思を中心に、看護、リハビリ、介護が連携し、最期まで住み慣れた自宅での生活を支えました。

## ケース　施設入所を勧められながらも、自宅での生活を選ばれた方

94歳男性。直腸がんによる出血を繰り返し、入退院と輸血療法を経験されました。
長期臥床によって歩行が困難となり、ADLも大きく低下。**独居での生活が難しいことから施設入所を勧められましたが、「家に帰りたい」という希望は変わりませんでした。**
再出血のリスクを理解したうえで、訪問診療、訪問看護、訪問介護などの支援体制を整え、自宅へ戻られました。



## 実際に行った訪問看護とリハビリ

訪問看護では、清潔ケアや糖尿病管理、排泄状況の観察などを実施。
医師、ヘルパー、ご家族とは連絡ノートを活用し、日々の変化を共有しました。
膝の痛みに対しては**楓の風の訪問リハビリ**を導入。

**疼痛が軽減し、ベッド上から端座位が可能になると、「また歩きたい」「2階に行きたい」**という意欲が生まれました。
病状が進行してからは訪問回数を増やし、ケアマネジャーや介護職と連携して療養環境を整えました。




## その後の経過と気づき

病状の進行に伴い、発熱や食欲低下、下血が見られるようになりました。
看護師が最期を過ごしたい場所について確認すると、**「入院はしたくない」**とはっきり答えられました。それ以降、訪問看護を増やし、**在宅での看取りに向けた体制を整えました。**
歩行の再獲得には至りませんでしたが、**リハビリによる疼痛軽減は、再び動きたいという前向きな気持ちにつながりました。**
最期はご自宅で息を引き取られ、**娘さんと一緒にエンゼルケア**を行い、**準備していたスーツを身にまとい**、旅立ちの準備のお手伝いをしました。
どんなに困難な状況でも、その方のご希望に最期まで寄り添いながら、多職種で連携を取りながら支えることができたことに感謝をしたいです。